

## 3. あとがき

日本各地の霧については、多くの調査がなされてきており、また、海霧についての報告も多い(たとえば、昆, 1974)。しかし、これらはいずれも霧の出現する気象状況についての調査であり、霧におおわれている領域の広がりについては、いくつかの観測点から推定するにとどまっている。衛星のデータによって、可視画像のある日中はもちろんのこと、赤外画像しかない夜間でも、日中との関連を求めることにより、不十分ながら、ある

程度霧・層雲の全様を連続的にとらえる可能性ができたと言えよう。

## 文献

- Anderson *et al.*, 1974: Application of Meteorological Sattelite Data in Analysis and Forecasting, Essa, Tech. Rep., NESG 51.  
 昆 幸雄, 1974: 三陸の海霧について. 東北地方予・警報技術研修講座, 120-153.

## 地球科学講座 3

## 気象

根本順吉, 新田 尚, 曲田光夫  
 倉嶋 厚, 久保木光熙, 安藤隆史,  
 篠原武次, 原田 朗 著

共立出版, 1979年, 296頁, 菊版,  
 3,000円.



本書は、地球科学講座の一部として出されたものである。講座刊行のことばによれば、従来の地学教育の体系を脱皮しようという国内外の状況の中で役立てたいと意図されたものである。したがって本書も興味ある図を使い、最新の内容を平易に解説するよう努力されている。最近問題になっている気候変動について、10頁をさいて解説しているのもその結果であろう。

内容は、気象学史略、大気、大気の物理、気候と天候、総観気象、天気予報、応用気象、気象の観測と統計、の8章に分かれており、応用(水文、航空、農業、海洋、汚染、天候制御)まで含めて気象学全般について書かれて

いる。従来の気象学の本では、ややもすれば、応用や観測統計が二の次にされるが、本書では2章をさいている。長期予報、数値予報を含めた天気予報について、1章をとっているのも本書の特徴であろう。長期予報の技術はまだ確立されていないだけに書きにくい面もあるが、その要点が旨く解説されている。他方、数値予報は、気象力学、熱力学等を基礎とし、かなり論理的なものなので、専門家にはわかり易いが、専門外の人には難解なもの、それを実に要領よく、その原理、現状等を解り易く紹介している。

また、付録に参考文献が載っているのは読者に親切である。

執筆者は、気象庁に勤務しているか、かつて勤務した専門家であり、技術の現場に一つの問題意識を置いており、それなりにおもしろいが、他面、気象力学などの説明が少なく、気象学の理論体系としては物足りない面も感じられる。しかし、気象学を広く学ぼうとする人にとって、信頼のおける教科書、参考書として大いに役立つものと思う。(有住直介)